

とい XXXII 2012

詩を読む	ブライト・ソネットの影……………楠瀬 健昭…2
本を読む	古代日本の統治機構構造……………松尾 庄一…7
	大学入試改革の行方……………和田 孫博…11
本を読む	et egisti mecum miris modis……………松崎 一平…14
編集後記	

プライト・ソネットの影

楠瀬健昭

次に掲げる詩 "The Caged Skylark" は、Gerard Manley Hopkins(1844-89)による Petrarchan sonnet である。1877 年夏、Wales の St Beuno's での作であるとされる。1875 年に "The Wreck of the Deutschland" で詩作を再開したホプキンスは、1877 年には、神の壮麗をたたえる "God's Grandeur" をはじめ、キリストにささげる最高傑作 "The Windhover" など、10 編の、いわゆるプライト・ソネット群をものにするが、このソネットは、その中のひとつである。

The Caged Skylark

As a dare-gale skylark scanted in a dull cage,
Man's mounting spirit in his bone-house, mean house, dwells—
That bird beyond the remembering his free fells;
This in drudgery, day-labouring-out life's age.

Though aloft on turf or perch or poor low stage,
Both sing sometimes the sweetest, sweetest spells,
Yet both droop deadly sometimes in their cells
Or wring their barriers in bursts of fear or rage.

Not that the sweet-fowl, song-fowl, needs no rest—
Why, hear him, hear him babble and drop down to his nest,
But his own nest, wild nest, no prison.

Man's spirit will be flesh-bound when found at best,
But uncumbered: meadow-down is not distressed
For a rainbow footing it nor he for his bones risen.

かごのひばり

大風をものともしないひばりが退屈なかごに構わずに置かれているように

人間の舞い上がるころは骨の家、みすぼらしい家に住まいする
かの鳥はとうてい野で自由に遊んだとは思われない
こちらは骨折り仕事で日々疲れ果てる労働が一生続くのだ

宙高く、芝草、止まり木にとまり、あるいは、あわれに落ちぶれた舞台に立ち
鳥も人も時にはこのうえもなく甘美な呪文を唱えることもあるが
それでも時には独房の中でぐったりとうなだれることもある
また、恐怖に襲われたとき、激怒のほとばしるときには、格子をぐっと握りしめることもあ
る

甘美な鳥、鳴鳥が疲れを知らないということではない
まあ、聞きなさい、鳥が自分の巣に舞い降りながらさえずるのを聞きなさい
でも、それは自分自身の巣、自然の巣であって、牢獄ではない

人間のころは、とどのつまり肉に縛られている
しかし、煩わされることはないのだ、虹は草地を踏むが、
草地は困ることはない。ころも復活した体に悩まされることはないのだ

この詩はブライト・ソネット群にあつて、"The Lantern out of Doors"とともに、いささか憂いを含んだものになっている。もちろん、「神の壮麗」にも、神のわざをたたえながら、人間のしわざを嘆く部分があり、"In the Valley of the Elwy"の中でも、ホプキンはウェールズの世界を賛美しながら、「ただここに住んでいる人間だけがこれと感応しないのだ」と詠う。"The Sea and the Skylark"にも、「この浅薄な脆弱な町」、「この濁ったあさましい世」など、「活気と魅力を失っている」という表現は見られるが、それらは主題を引き立たせるものにすぎない。この時、詩人はそういう人間存在とは一定の距離を取っていて、みずからはその中に含まれていないかのようなのである。

ところが、「戸外の提灯」では、詩人はそこに登場する人間との距離が近く、実体験に基づく表現に思えるところがある。姿や心が美しい人も「貴い光線を降らせてくれるが、...死か疎隔かがまもなく彼らを消耗してしまうのだ」という一節があるがためか、最終的に「キリストは心にかけたまう」のは確実ではあるが、何かしら深い悲しみが感じられる。そして、霊魂と肉体の問題を取り上げる詩、「かごのひばり」でも、人間は最終的には救われるわけではあるが、それでも、この詩を読みながら、現世に生きる人間の苦しみや悩みを感じてしまうという点において、この詩には「チョウゲンボウ」の華麗なる飛翔にあこがれ、"Pied Beauty"において神の創造したまえる「斑なる美」をたたえ、"Hurrahing in Harvest"で実りの秋をむかえ「収穫の歓喜」に酔う詩とは、同じ時期に書かれていても、違った趣がある。

しかし、おそらく、これは信仰をもたない者の感覚であろう。ホプキンは、かごの中の鳥のように、肉体によって自由が束縛されている、ころの状態を嘆いているわけではない。

このようなこころの状態は、十四行詩の前半部である、八行連（二つの四行連）で提起された問いである。大きな発想の転換がなければ、容易に解決しない問いである。それだけに、俗人には解決不能の苦境のように思われる。死によって、もしかしたら、魂は肉体という束縛から解放されるのかもしれない。しかし、肉体をもたないものは、感覚をもたないかもしれない。また、その意志を表現するには、あらたな肉体を必要とするのかもしれない。あるいは、魂は肉体と一体であり、肉体が減れば、魂も消滅するのかもしれない。肉体なしには、わたしたちは考えることはできないのかもしれない。実際、科学的に考えれば、それが事実かもしれない。

ソネット後半部の六行連（二つの三行連）で与えられた答えは、わたしたちの及びもつかない考えである。信仰と言うべきかもしれない。つまり、聖書によれば、人間は、キリストがそうであるように、死後、復活するわけで、そのときには、もちろん肉体をもつわけではあるが、生前の肉体とは違うのである。すなわち、「コリント人への第一の手紙」15章49節には、「わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう」とある。

その復活体は、この詩の最終行では、bones risen と表現されている。あきらかに the risen Christ、すなわち復活したキリスト、昇天したキリストを想起させる言葉づかいである。つまり、福音書に見えるイエスの復活と昇天の出来事だけでなく、キリスト教信者もまた、「終わりのラッパの響きと共に」（コリント 15：51、）イエスに似た体を与えられることを思い出させる言葉である。Bones は body（身体）であり、skeleton（骨格）でもある。Bones risen は二行目の、同じく身体を表す bone-house（骨の家）という単語と対をなす言葉でもある。Bone-house は、現代英語の bone house（棺桶、納骨堂）という死を連想させる意味も響かせながら、古英語の bānhūs(bone house=body)という kenning を応用し、さらに mean house（陋屋）と巧みに言い換え、bone-house が「みすぼらしい」ものであると語りつつ、house の同音反復で、リズムよく軽やかに畳かける。ケニングとは、「一つの名詞を複合語または語群で隠喩的に表現する技巧：中世ゲルマン諸語（特に古期英語や古期北欧語）の詩にみられる特徴で 18 世紀の詩でも用いられたもの」である。ケニング（代称法）の例としては、hwælweg (=whale-way=sea)、woruldcandel (=world-candle=sun)、oar-steed=ship がある。

また、この bones risen の risen と、最終行で alliteration（頭韻）を踏む rainbow は、bones risen の性質を巧みに説明する。すなわち、虹は天と地をつなぐもの、実体はありながら、大地に足を置いても質量を感じさせない。それは、まるで復活したイエスを思わせる。実際に、肉体をもちながら、イエスは霊のように自在に現れたり消えたりするだけでなく、天上と地上を往来することができるからである。しかも、rainbow は rain（雨）と bow（弓）からなり、そのように分かつたらば、bones risen との間で、rain、risen の r だけではなく、bow、bones の bo(w)においても、同音反復しながら、音の交錯配列を楽しんでいる。また、rain-bow は bone-house と b o(w)を共有しながら、「雨の弓」、「骨の家」という単語そのものの組成が似通っていることも興味深い。すなわち、bone-house は、bones

risen からすると rainbow という一見、単なる比喩と思える単語を介して、bones risen へと昇華している。

こうして、最後の三行連では、「人間のころは最善の状態であっても、肉に束縛される」と言い、一瞬、八行連の問題提起にいったん答えを保留するかのようみせて (flesh-bound と found at best において、f、b の繰り返しと -ound の同音反復によって、余裕を持った語り口で、軽やかな調子を生み出している)、次行の but uncumbered 「しかし、煩わされることはないのだ」で、きっぱりと宣言し、答えを求める読者の期待感を高めるかのようである。そして、rainbow のメタファーを経て、bones risen に至り、はじめて読者の疑念は氷解する。Man's spirit と his bones risen との関係は、meadow-down と rainbow の関係と同じであるとするメタファーは、巧妙である。

また、十四行詩を四つに分割したとき、いわば漢詩の起承転結の転にあたる、ひとつ目の三行連では、かごのひばりではなく、自然のひばりが自分の巣、野にある巣に戻ることに、本来の自由に大空を飛翔する姿、休息のために自分の巣（もちろん、それは牢獄ではない）に戻ることを詠うことで、捕えられ、かごという cell (独房) に入れられているのは、人間の仕業によることを思い出させる。ここで、詩人が sweet-fowl、song-fowl、hear him、hear him、drop down、own nest、wild nest などの同音反復と頭韻を多用するさまは、ひばりの鳴き声のように聞こえる。

ここまで、ソネットの後半部を中心に読んできたが、内容的にも詩のリズムからも、わたしが最初に述べた憂いなどは、見当たらない。したがって、もしも、わたしの印象に間違いがなければ、そのわけは前半部にある。

第一四行連は、落ち着いた滑り出しで、本来自由であってほしい人間の精神が、肉体という枠組みから逃れられないという宿命を、囚われの身のひばりに例えて、荘厳に語る。勇ましく dare-gale skylark で始まる第一行は、その skylark が scanted と頭韻すると、すっかりその勢いをそがれ dare は dull となりはて、かごの中に入っている。二行目においても、man's mounting spirit と m を重ねて威勢がいいが、実は bone-house、mean house と畳みかけられ、高揚すべき mounting は mean となり、最後は、dwells と一行目の dull と同じ d で終わる。この音の反復は、次の二行でも、bird beyond、free fells、drudgery、day、labouring、life と執拗である。頭韻だけでなく、各行で、gale、cage、mounting、house、remembering、fells、day、laboring、age と、母音押韻も几帳面に施されている。脚韻の abba だけでなく、非常に計算された仕組みになっている。しかし、四行目の「こちらは骨折り仕事で日々疲れ果てる労働が一生続くのだ」には、もちろん一般論で語ってはいるが、何気なく詩人の実感がこもっているように聞こえる。

第一四行連を承けて、第二四行連では、さらにひばりと人の、それぞれの状況を説明する。「宙高く、芝草、止まり木にとまる」のは、ひばりであり、ひばりを入れるかごは高い所につるされ、そのかごの中には芝草がしかれている。止まり木もあることだろう。また、「あわれに落ちぶれた舞台に立つ」のは人間であり、ふと、詩人が説教壇に立ち、説教し、礼拝をつかさどる姿を、わたしは想像する。ひばりはかごの中にあっても美しい声でさえずり、

同様に肉に閉ざされていても、人は神の教えを朗々と説く。しかし、ひばりも人も、それぞれかごの中、独居室で *droop deadly* となることもある。あるいは、「恐怖に襲われたとき、激怒のほとばしるときには」、ひばりは、かごから脱出しようと、かごのすきまに首を突っ込み、人は肉体をどうすることもできなくて、窓格子をつかむこともある。

ここでは、詩人はひばりに感情移入し、何かしら自分自身の境遇をも嘆いているようにも聞こえてしまう。もちろん、ホプキンは人間一般のことを詠っているわけであるから、そう聞こえるのは、わたしたちの錯覚かもしれない。ただ、人間は信仰心があれば、やがては復活し、その肉体に煩わされることはないとはいえ、現世では、やはり、*windhover* のように飛翔することはできない。この詩のタイトルは "The Caged Skylark" である。タイトルが主題をかならず表現するわけではないが、"Bones Risen" と単刀直入は避けても、"Man's Mounting Spirit" とか "Rainbow" になっていれば、ブライト・ソネット群にふさわしいのかもしれない。いずれにしても、このタイトルから、わたしたちは、Henry Mayhew の *London Labour and London Poor* (1851) にあるように、何千何万という数のひばりが捕らえられ、売り物にされていた時代を思う。

"The Caged Skylark" のテキストは『ホプキンズ詩集』第4版による。「かごのひばり」は拙訳である。その他のホプキンの詩の引用は、安田章一郎『ホプキンズ研究』による。『聖書』からの引用は、日本聖書協会（1976年）による。ケニングの説明は、『英和大辞典』（研究社）からの引用である。

古代日本の統治構造

松尾庄一

倭や倭国と呼ばれていた3世紀から7世紀にかけての古代日本の統治の様子を文献に基づいて再現することを試みたい。

1 邪馬台国時代

魏志倭人伝（正式には「三国志東夷伝倭人条」）によると、3世紀中葉の日本（倭国）は、約30の国（在地権力）の首長から共立された邪馬台国の女王卑弥呼が外交、交易、防衛等を代表していた。大率、大倭、卑弥母離等の官人が命を受け、その任に当たった。

邪馬台国では、卑弥呼と男弟の共同統治が行われ、都城には宮室、楼観、城柵が備わり、武器を持った者が常に守衛していた。また、耕地・人民の把握と余剰食糧の一部の収税の仕組みがあり、集めた食糧を蓄積する倉庫があった。さらに、人民には大人と下戸との身分差があり、その間に厳格な礼式があった。なお、卑弥呼には多数の婢がかしずき、死んだときに百余人が殉葬された。

卑弥呼は鬼道により衆を惑わしたとされたが、神の言葉を伝える巫として機能していたと思われる。航海の無事を祈る持衰（じさい）の存在とともに、当時の倭国は「呪術」に基づいて統治されていたのであろう。魏志東夷伝によると、朝鮮半島諸国では「天の祭祀」が行われたとあることから、邪馬台国独特の祭祀が行われていたと思われる。

人民は主として稲作、麻作り、養蚕、漁労で生計を立てた。産物等の売買の場として市が設けられ、それを管理する「大倭」という官職が置かれた。諸国の間では物資の交易が行われており、北部九州の伊都国に「大率」を駐在させて諸国にまたがる交易ルートを監察させた。諸国は大率を畏れ憚り、まるで中国の刺史（任地の役人の仕事ぶりを監察し、中央政府に報告する役人）のようであったとされる。大率は卑弥呼が魏の都、帯方郡等へ使者を派遣するとき、また、魏皇帝や帯方郡が使者を送るときには伊都国の港で文書や下賜品を確認し、間違いが起こらないようにした。

まるで、国家が存在したかの如き記述であるが、その正確性について渡邊義浩教授は『魏志倭人伝の謎を解く』（中公新書）の中で、「国制、身分、卑弥呼の王権に関する記述は、魏皇帝の使者や帯方郡の官人の報告書に基づく事実の記述であり、当時の倭国の在り方を知る貴重な資料である」と述べている。もっとも、当時の日本全体にあてはまるかどうかは疑問であり、主として、壱岐、対馬、玄界灘沿岸等の先進地や邪馬台国の状況とみなした方がよいかもしいし、伝聞による誤解もありうることは留保したい。

2 崇神—雄略時代（3世紀後半から5世紀）

日本書紀はこの時代の統治に関して概略以下のように述べている（詳しくは前号拙稿を参照）。奈良盆地とその周辺を領域とする在地権力のひとつであったヤマト王権が支配領域の開発を進める一方、3世紀後半以降、吉備や筑紫、毛野等の地方王権等と連合体を組み、抵抗勢力を硬軟取り混ぜて取込み、5世紀の初めには列島をほぼ統合した。5世紀も後半になると、ヤマト王権の屋台骨であった葛城、吉備等の有力豪族も圧迫の対象となり、雄略期には、天皇（天皇号は7世紀後半に成立したとされるが、本稿では便宜上それ以前にも用いることとする）の専制化が進んだ。

執政官として後世に大臣・大連と呼ばれるような豪族が実際の政治を執り行い、地方官として6世紀に置かれた国造、県主の前身の官人が置かれていた。また、社会の階層化・分業化の進展で同一の職業に就く人間が集団化した結果、「とも」が生まれ、これが後に「部」となった。

この時代、王権と各地の豪族との抗争の結果、各地の豪族の支配領域を割いて設置されたり、各地の豪族が贖罪等の理由で貢納したりして屯倉が置かれ、地方豪族に対する楔の役割と王権の地方組織として機能した。また、仁徳紀のかまどの煙の記事にあるように、後世の庸調のような規模内容ではないものの、何らかの課役が実施されたと思われる。さらに、組織論としては、ばらばらの地方共同体集団をヤマト王権が個別に支配下に置くのではなく、中央豪族が多く地方豪族を氏（同族）として配下に抱え、中央豪族をしっかりと手元に引きつけること（氏族制）で全体を統治したと思われる。

邪馬台国時代に前述のような統治構造があったことを考えると、その後のヤマト王権のこのような記述は、相当程度事実を反映していると思われる。

3 継体朝以降（6世紀）

継体紀以降の書紀は、より同時代性のある資料等を参考にしたとみえて、統治構造に関する記述も充実している。それによると、継体が擁立されて磐井の乱に勝利したのち、安閑から欽明に至る時期に天皇が外交、軍事、祭祀の権を掌握し、国土全体に統制力を及ぼすようになったとされる。統制の手段として、継体紀、崇峻紀に見られるように、有力な地方首長層に領域的支配権を承認する国造等の姓（称号）を天皇が付与した。また、宋書によれば5世紀代には天皇だけでなく中央の有力豪族も同様に宋皇帝から叙爵されていたが、これらの者にも天皇から臣、連、伴造の姓が与えられるようになった。さらに、欽明・敏達紀に、「蘇我稲目に馬子に命じて吉備の国に白猪屯倉を置き、人民管理のための戸籍を整備した」との記事があるように、当代一の有力者も統制の対象とされたのである。

この時代に緩やかな結びつきの豪族連合的な社会から上下の規律の厳しい専制的体制へと切り替えられたと思われる。それを支える仕組みとして、天皇を生みだしうる集団を血縁的に区別し、その集団の中で天皇の地位を継承するという世襲制度を、また、政治思想として、天皇の出自が天に由来するという「天孫降臨思想」を本格的に導入した。一方、統治は天皇だけでなく、有力豪族と共同で行うという君民共治の考え方も生まれ、有力豪族の祖先

が天皇の祖先を助けることで国を作ったことを確認する神話が作られた。

4 推古朝後の改革

このような統治構造の変化が形となってはっきり表れたのが推古朝である。推古朝は、律令国家体制に変換していく出発点となった。推古紀元年（593年）条には、厩戸皇子にまつりごとを摂政させ、万機をことごとく委ねたとある。ただし、上宮聖徳法王帝説に「厩戸皇子が島大臣（馬子のこと）と共に天下の政を輔ける」とあるように、実際は馬子とともに国政を総理したと思われる。

厩戸皇子は、推古11年に冠位12階の位階制、12年に憲法17条、13年に服制をそれぞれ定めた。28年には、厩戸皇子と馬子が共議して天皇記・国記等を編纂した。また、推古紀には、畿内の要所に灌漑用の池溝を建設し、また、難波から飛鳥の京に通じる大道を建設した等の記事があり、インフラ整備が進んだことがうかがえる。

天皇権力の強化について、蘇我馬子が天皇直轄地である葛城県を封土としたいと願ってきたことに対し、推古天皇は「馬子は母の兄弟であるが、葛城県を与えることになれば、「愚かな婦人がまつりごとをして直轄領を失った」と言われる」と言って許さなかったとの記事（推古紀32年10月条）がある。

このような推古朝の改革を経て、国造制から郡司制への転換、律令の制定、天皇号・日本国号の案出、貨幣の鑄造、都城の築造、文書行政の推進等、国家の体制づくりが進んだ。特に、天智・天武天皇は、諸国を統括する古代日本の支配者としての地位を確立した。さらに、天武天皇は、天皇と豪族が複層的に人民と土地を支配する体制を天皇が直接支配する体制への改革を試みた。

5 天下の支配者としての天皇制の確立

最後に、天皇権力や権威の確立に関する若干の考察を試みることにする。

王権の支配地を天下（あめのした）とし、その支配者が天皇であるとの概念は、江田船山古墳出土の鉄刀銘文にあるように遅くとも雄略朝にはあったが、それが具体的に形となって表れたのは継体朝以後である。例証として、前述の姓の付与のほかに、継体の子である安閑紀に「国造の地位をめぐる内部紛争にヤマト王権が介入し、見返りに4か所の屯倉の献上を受けた」との記事がある。ヤマト王権は卓越権力として地域における首長層の内部紛争を調停・解決するという政治的機能を果たし始めたのである。

天下の支配者としての天皇権力や権威が地方豪族レベルまで広がった例として、常陸国風土記の行方郡の開発に関する記事がある。蟹江宏之教授の「律令国家と万葉びと」（『日本の歴史』3（小学館））からその要旨を紹介する。

6世紀初めの継体天皇の時代に、ある豪族が谷を開いて水田にした。その直後、蛇に化身した夜刀神が群がって田の耕作を妨害し、農民がおびえた。これをみて豪族が夜刀神を打ち払い、山の入り口に標柱を立て、「ここより山側は神の地、ここから下は人間の田とする」と言って自ら神を祀る者となった。豪族は、開発によって生じた自然との軋轢を土地神を祀

る行為で鎮めたのである。

ところが7世紀中葉の孝徳天皇の時代に、後に行方評の長官となる地方豪族がこの谷を占有し、件の標柱を越えて用水池を構築したところ、夜刀神が池のほとりに集まってきた。そこで、この豪族は「配下の民に良い暮らしをさせようと天皇に誓って池を作っているのだ。」と言って、魚や虫の類をことごとく打ち殺した。これを見て、夜刀神の蛇たちはその場を去り、隠れてしまった。評の長官となる地方豪族が自然をおそれずに、王権に誓いを立てて開発を行うようになったのである。

これに類した記事は推古紀26年条にある。安芸の国で造船用の木を伐ろうとした地方豪族に土地の者が「雷神の神木だから伐ってはいけない」と言ったところ、豪族は、「雷神といえども、どうして天皇の命に逆らえようか」と言って人夫に伐らした。すると、大雨が降り、雷鳴が轟いた。この時、豪族が剣を取り出して「人夫を害することは許さない。我が体を傷つけろ」と言って天を仰いで待ったが、豪族に落ちることはなかった。そのうち、雷神は小さな魚になり、木の枝に挟まって死んだ。

このように天下の支配者としての天皇権力や權威が地方の豪族レベルにまで広まった。ただし、常陸風土記の記述では継体朝時代には及んでいないことになるが、これは継体朝が移行期であり、畿内から遠く離れた東国の常陸までは広まらなかったから、とも考えられる。

【附記】

本文中、日本書紀に関する記述は、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』（岩波文庫）を基に筆者が要訳した。また、魏志倭人伝に関する記述は、前掲書『魏志倭人伝の謎を解く』の附章「魏志倭人伝訳注」を参考にした。

大学入試改革の行方

和田孫博

大学入試センター試験の資格試験化の検討、飛び級入学、東大や京大の推薦入試、秋入学への移行など、高大接続の在り方が様々なフェーズで問題となっている。一九七九年に共通一次試験が導入されて以来三十数年、大学入試は共通一次やその後継のセンター試験を中心に回ってきた。その間、国公立大学も私立大学もいろいろ入試制度を修正しながら、少しでも優秀な学生の確保に努力してきた。高校に身を置く者としては制度が変更されるたびに右往左往するのだが、大学側としては背に腹は代えられないというのが実情だろう。しかしやがて少子化が更に進めば、そう遠くない時期に小手先の制度修正では破綻を防げない状況になるのではないかと危惧される。これまでの大学入試制度の変化を概観しながら、問題を整理してみよう。

共通一次試験が導入される以前は、国公立大も私立大もそれぞれ独自の入試を行っていた。ある意味で、その入試問題がこの程度の学力はつけて来て欲しいという大学側から受験生への発信であり、受験生は志望校の入試に合格することをモチベーションとして勉強した。それが今で言うアドミッションポリシーであったのだ。しかし、多くの科目を課す入試は受験生への負担が大きいとか、高校教育が受験勉強化しているという批判から、共通一次試験が開始され、大学独自の入試、いわゆる二次試験は科目数が絞られることになった。はじめは国公立大のみの参加だったが、一九九〇年に大学入試センター試験に改編されてからは、徐々に私立大も参加、今では六八三大学（国立八二、公立八一、私立五二〇）、一五七短期大学がセンター試験を利用している。

センター試験は、難問奇問も多かった大学独自の試験に比べると、高校の指導要領に沿った出題であるため、米国のSATや英国のGCSE、GCE(Aレベル・Oレベルテスト)と同様、大学入学資格試験的色彩をある程度は帯びているが、マークシート方式であるため思考力、発想力、プレゼンテーション能力などは測り難く、知識量や注意力に比重が置かれすぎていう批判がなされてきた。それとともに、大学生の中に自ら課題を見つけ自ら解決していく能力に欠ける者が増えたという実感が、年を追うごとに大学の先生方から聞かれるようになっていった。

その上、この三十数年間に少子化が進み、大学進学希望者数が全大学の入学定員の合計を下回る、いわゆる大学全入時代が到来した。私立大学の中には、一般の推薦入試以外にも指定校推薦、AO入試、一芸入試、スポーツ推薦など、事実上学力試験を課さないで入学を認める制度を設けて、学生の確保に涙ぐましい努力をしている所もある。そういう状況で多くの高校生はいわゆる受験勉強を経験せずに大学に入学できるようになったのだが、だからと言って中等教育のまとめ時期としての本来の高校教育が可能になったかというところでも

ない。入試勉強というモチベーションが薄れたことに加え、「ゆとり教育」時代のカリキュラムで授業時間が減り、修得必要単位数も低減された結果、大学生の基礎学力の低下が忌々しき問題となってきたのである。

また、多くの私立大学がAO入試や推薦入試で学生を青田刈りに確保しようとする結果、一般入試の受験生が激減しているし、センター試験のみを利用する受験方式を採用する私立大も増えてきている。そのため、独自入試で大学のアドミッションポリシーを発信できなくなってきたおり、センター入試方式の合格者の追跡から割り出されたその大学の偏差値によって受験生は大学を選択する。つまり、偏差値が下がると大学の評判にも影響し、翌年の志望者数も減少するというような負のスパイラルが起こる可能性があり、大学側は神経を尖らせている。今年の春、某私立大の系列進学校の受験生が、その私立大学への進学を希望していないにもかかわらず大挙してセンター利用方式での受験を強いられたという問題が発覚したが、大学側が偏差値の高い生徒に受験させることで自校の受験レベルを守ろうとしたことがその一因であると言われている。（推薦入試で予定より大幅に多くの入学予定者を出したため、一般入試では合格後の辞退者を増やし、入学者数を抑えて国の補助金基準に適合するようにするためだったという報道もある。）このように、センター試験の利用大学数は増えているものの、時代や社会の変化に伴い、大学側が求める生徒を思うように確保できていない状況で、センター試験を含め高大接続の在り方の検討と是正が待たなしになっている。

そこで文科省ではセンター試験を改編して、すべての大学進学希望者に課す高大接続テストとか、高校在学中に受ける高等学校学習到達度テストなどの創設を検討している。その狙いは、センター試験のように一点を争う競争試験ではなく、高校卒業レベルに達しているかどうかをチェックすることにあるとし、これをもって大学入学や高校卒業の資格試験とすれば、高校生たちは明確な目標ができて意欲的に頑張るだろうという考えによるものだ。しかしそれは逆に見れば、結果次第ではどこの大学にも進学できない、高卒と認められないという、厳しさを兼ね備えた諸刃の剣と言える。かと言って、ほとんどの高卒生が難なくクリアできるレベルのテストであれば、学力保証の道具としては役に立たないし、生徒たちのモチベーションアップにも繋がらない。これらのテストの目的やあり方が曖昧なまま実施に移されても、効果がないばかりか高校の教育現場にも生徒たちにも混乱を招くばかりであろう。実施には相当の制度設計が必要である。

さらに、仮にそのテストが全国一律の資格試験として機能するとして、それに合格すればどこの大学にでも入学できるようにするというわけにはいくまい。結果的には各大学の学生分捕り合戦はこれまで通り続く。一層の少子化の中、学生にとって魅力ある大学が生き残り、そうでない大学は淘汰されることになる。今はそれなりの倍率の二次試験が実施できている国公立大学も例外ではないだろう。本来、どこの大学もアドミッションポリシーをしっかりと打ち出し、そのポリシーに沿った教育を受けたいと思う学生が志願し、その中からその教育に堪える者を大学側の責任で選抜するのが入学者選抜のあるべき姿であろう。学力検査であれ、推薦であれ、AO入試であれ、しっかりとしたポリシーがあつて、それを実現することができるのであればどの方式を利用してもいいと思う。事実、米国や英国ではアドミッショ

ンオフィスが機能し、自校にとって有為な人材を確保できている大学はたくさんある。その代り膨大な時間と費用をかけているのだ。日本の現状は、安易な選抜制度を通して学生を入学させ、その学生たちの能力が低いことや学習意欲に欠けることを高校教育のせいにしていくが、それは筋違いであって、大学側が選抜にどれだけ本腰を入れているか、自省して欲しい。

今年の三月に相次いで発表された東大・京大の推薦入試（京大は学部によってAO入試）の三年後からの導入は、学力試験のみで学生を選択する方式は守りつつ、一定の割合でそれ以外の資質や能力を持つ学生を混ぜることで、学生全体の活性化を狙ったものだと評価できる。どちらも全定員の三～五％に過ぎないとは言え、これまでの学力試験一辺倒の（しかも二次試験に比重を置いた）入試制度に風穴を開けるものとなることを期待したい。ただし、数時間程度の面接では不十分で、やはり米国のアイビーリーグ大学並みのアドミッションオフィスを立ち上げ、一年間かけて調査して選抜するようなものにして、学力検査で選ぶよりも優秀な学生が選べたという追跡結果が出ることを期待している。米国ではアーリーアクション（一般の学生より早い段階で入学の内定が出ること）で選ばれることを一つのステータスとして尊ばれるが、日本でもこういう制度が確立すれば、極めて優秀な人材が集まってくるだろう。日本をリードする二大学の新入学制度の成否を他大学も注視しているはずである。

もう一つは、入り口をもう少し広き門にして、出口管理をしっかりすることを提案したい。日本の大学は、特に国公立大学は、補助金の問題もあって入学定員を厳守せねばならないと聞かすが、大学に限らずどのような社会にもミスマッチは不可避であるから、入学時点では定員より何割か多めに取れるようにして、学業などの結果次第で篩にかけるようにしてはどうだろう。その代り、適応できなかった者は容易に転身できるような、いわゆるセイフティネットを整備すべきである。一年次終了や二年次終了から他大学へ転入できる制度や企業が大学中退者を受け入れる制度を拡充することで、大学側もミスマッチの学生の転身を積極的に支援することができるはずだ。大学入試改革を推し進めるにはそういう制度設計も不可欠ではなかろうか。

○本を読む●

「あなたはふしぎなしかたで、
わたしに関与した」

(et egisti mecum miris modis)

-アウグスティヌス、『告白』、第五卷第七章一三節-

松崎一平

『告白』第一巻から第九巻にかけての、いわゆる自伝的部分は、『告白』の著者であるヒッポ・レギウスのカトリック教会の司教アウグスティヌスが、カトリック・キリスト教の神に回心するまでの、いわば、キリスト教の圏外における生の軌跡を回想しながら、そこにおのれにたいする神の配慮（恵み）を見いだそうとする試みである。その試みをよく見てとることができる箇所のひとつが、第五巻のなかば、カルタゴの若き修辞学者がローマにいく決断をするところである。その箇所を読みながら、『告白』の著者が「神の配慮」をどのように考えるのか、紙幅のゆるすかぎり明らかにしたい。

*

『告白』第五巻のなかばでアウグスティヌスは、カルタゴを訪れたマニ教の司教ファウストゥスとの交流について回想する。

若きアウグスティヌスは、『ホルテンシウス』体験をきっかけに激しく燃えあがった「知恵への愛」、すなわち哲学的探求への意欲をみたしうる場を期待して、おそらく一九歳のころ、マニ教に参加した（三・六・一〇）。以来、教祖マニが受けとった啓示にもとづくといわれる教典（神話的宇宙生成論を核にもつ）を熱心に学びながら、いっぽうでキケロなどの哲学の書やギリシア哲学に由来する天文学の書物をも学び、しだいに後者の理論の合理性を理解するようになり、それとともに、マニ教が真理であると主張していたその宇宙論に疑いをもつようになる（五・三・四-四・七）。その疑いをマニ教の同志にぶつけてもかれらは答えることができず、口をそろえて、ファウストゥスが来れば解消してくれるだろう、という。長年待ち焦がれたファウストゥスとの出会いは、しかし失望に終わる（五・六・一〇-一一）。すでに八年あまりカルタゴで修辞学者としてキャリアを積みながら、マニ教以外の哲学上の著作をも広く学んでいた二九歳のアウグスティヌスは、マニ教を代表するこの学者の学識の貧弱なことをただちに了解した。アウグスティヌスの回想を聞こう。

……ほかのひとたちがかれと話しあってもさしつかえないときに、わたしの親しい連中といっしょにかれの耳をとらえて、わたしを動かしていたことがらを差したとき、わたしはすぐにわかった、かれが文法学、しかもありふれた程度のそれ以外の自由学芸を欠く人間であることが。そしてかれは、トゥッリウス〔キケロ〕のいくつかの弁論と

セネカのわずかな書と詩人たちのわずかとラテン語で巧みに書かれた自身の宗派のいくつかの書巻を読んでおり、また毎日の説教の実践があったので、雄弁—それは、才能の管理と生来の感じのよさとによって、いっそう好ましくいっそう説得的になっていた—が備わっていた。(五・六・一一)

アウグスティヌスは、こうしてファウストゥスの学識の乏しさに失望し、長年の疑問についてかれから答えを得る望みを失う。

じつのところ、かれが抜きんでているとわたしが思っていたあれらの学芸について、かれが見識を欠くことがわたしにじゅうぶんに明らかになってから、わたしは、わたしを動かしていたことがらをかれがわたしにたいし解明することができる望みを失いはじめた。(五・七・一二)

若きアウグスティヌスが哲学的探求に熱心に取り組み、そのための場としてマニ教に参加したことを考えると、マニ教徒たちの最後の砦というべきファウストゥスによって疑問が解決される希望が完全になくなったのなら、それ以上ファウストゥスと交際する必要もマニ教としてとどまる必要もない。ところがアウグスティヌスは、ファウストゥスのある意味で評価し、交際を続けた。順序は前後するが、かれの回想を聞こう。

……かれは自分がそれらのことを知らないことを知っていたし、それを告白することを恥じもしなかった。かれは、わたしが経験した多くのおしゃべりども—かれらは、それらのことをわたしに教えようと努めながらも語らなかつた—に類する者たちと同じ類ではなかった。たしかにこのひとは、ころをもっていた—あなたに正しく向けられてはいなかったにしても、自分自身にはなほだしく不注意というのでもないころを—。かれはみずからの無知をいつも知らないわけではなく、軽率に議論をすることによって、そこからのいかなる出口も容易な帰路もかれにないようなことらにおのれをおしこめることを望むこともなかった。これによってもまた、かれはますますわたしに気に入った。じっさい、告白する精神のつましはいっそう美しい、わたしが知りたいと欲していたあれらのことがらよりも。そして、いっそう困難でいっそう煩瑣なすべての諸問題においても、かれがそのようであることを、わたしは見いだした。(五・七・一二)

ここには、長年つきあってきたマニ教徒の饒舌と無知にたいして高じていた不満と、かれらの学問的寵児というべきファウストゥスが、哲学を学ぶカルタゴの若き修辞学教師にたいして示した、ほかのマニ教徒たちにはまったく見いだせなかつたその人柄の魅力とが回想されている。その魅力は、端的にいうと、知ったかぶりをして、かえってにっちもさっちもいなくなる愚を避ける、みずからの無知をわきまえた率直さだった。そのことは、アウグス

ティヌスが、カルタゴのマニ教徒たちとの付き合いのどんな点にうんざりしていたのかを教えてくださいるとともに、カルタゴの若き哲学の徒が、ソクラテスにあこがれをいただいていたらしいことを垣間見せてもいる（松崎、二〇一二年）。アウグスティヌスは、期待していたファウストゥスの知的レベルを知り、かれをほめそやしていたマニ教の他の学者たちにたいする期待は完全になくなったが、うえに述べたとおり、その学識に失望したファウストゥスと親密に付き合い始める。かれの回想を見よう。

こうしてマニの書に集中していたわたしの熱意は粉碎され、わたしを動かしていた多くのことがらにおいて、高名なファウストゥスがそんな風であることがあらわれたときに、かれらのほかの学者たちについていっそう絶望して、わたしは、その時期すでに修辞学者としてわたしがカルタゴの青年たちに教えていたその学問において燃えあがっていたファウストゥスの熱意におうじて、かれと時を過ごしはじめ、かれが聞いたことがあって読みたいと望んでいたものや、わたし自身がそのような才能に適していると判断したものを、かれと読みはじめた。（五・七・一三）

アウグスティヌスは修辞学者として、ファウストゥスの希望と学力にふさわしい修辞学の教材を選択して、ともに読みはじめたというのである。カルタゴの若き修辞学者は、みずからの無知を認めるファウストゥスの好ましい人柄を、むしろよき学習者として評価した。おのれの無知をともに率直に認め合うところから始まる協同の探求に、ソクラテス的な交流の魅力を感じ取ったのかもしれない。ただし、アウグスティヌスの役割はソクラテス寄りであり、ファウストゥスは生徒の側になる。周知のように、つづく第八章一四節でアウグスティヌスは、カルタゴの学生が乱暴狼藉のかぎり尽くすので、学生たちの学習態度がよいという評判のローマにいて教える決意をしたことを回想していることから推せば、ファウストゥスとの協同において、理想に近いしかたで教えることによるこびを感じたのかもしれない。『ホルテンシウス』に誘われた若き哲学の徒が、真の知恵を心底から希求していたということだろう。

さらにアウグスティヌスは、マニ教との関係についても継続する。かれによると、その理由はいかのとおりである。

……そのセクト〔マニ教〕において達成することをわたしが企てていた、わたしのすべての意欲は、そのひと〔ファウストゥス〕が知られると、まったく生滅したが、かれらから完全に離されることにはならず、いわば、もっとよいなにかを見いだしていないので、より優先されるべきなにかがたまたま輝きだすことがないかぎり、どんなしかたによってであれ、すでにとびこんでいるもの〔マニ教〕に、当面満足しておこうとわたしは決心した。（五・七・一三）

カルタゴの修辞学教師時代の終わりころ、おそらく三八三年、二九歳のアウグスティヌス

は、哲学探究の場としてマニ教に完全に絶望しながらもそれにとどまり、絶望のきっかけとなったファウストゥスとの付き合いを、どちらかという教える立場に立って楽しんだ。うへの引用文で語られているように、そのころアウグスティヌスは、哲学の徒として、マニ教から離れようとしつつ、どこに向かうべきかわからないという、いわば宙ぶらりんの状態にあった。それから二〇年後、『告白』を書いているヒッポ・レギウスのカトリック教会の司教は、そのようなありかたを、以下のように説明している。

じっさい、あなたの手は、わたしの神よ、あなたの摂理の隠されたところで、わたしのたましいを見捨ててはいなかったし、わたしの母のころの血から、涙をとおして昼に夜にあなたにいけにえが献げられていたし、あなたはふしぎなしかたで、わたしに関与した。あなたこそがそのことをおこなったのだ、わたしの神よ。じつのところ、「主によって、人間の歩みは整えられ、その道をかれは望むだろう」（詩編三六・二三）。だが、救いのために、いったいなんの配慮があるというのか、—あなたの造ったものらを造り直すあなたの手がなければ。（同、下線は松崎による）

引用文の、とくに下線部から容易に読み取れるように、アウグスティヌスは、三八三年ころ、カルタゴをあとにしてローマに移る時期の、自分の中途半端なありかたを神の配慮によるものとみなし、「ふしぎなしかたで」と驚いている。それはどういうことか。

周知のように、アウグスティヌスが母を欺いて、夜半にこっそりとひとりで船出して（五・八・一四）向かったローマでの宿所のあるじは、かれと同じマニ教徒の聴聞者だった（五・一〇・一八）。期待したローマの学生たちは、なるほど学習態度は期待どおりだったが、教師に謝礼を支払うころになると、しめしあわせて突然、別の教師のもとに移った（五・一二・二二）。こうしてローマで教えることに執着する理由もなくなったところで、これもマニ教徒仲間の協力を得て、帝都ミラノの修辞学教師のポストを手に入れる（五・一三・二三）。ミラノの司教アンブロシウスと対立していた、古来の宗教の信奉者であったローマ市の長官シュンマクスが、ミラノのキリスト教的空気にくさびを打ち込むために、マニ教徒の若い修辞学教師に白羽の矢を立てたと推測されている。三八四年にかれはミラノに着任し、二年ほどのちに、アンブロシウスの説教を聞いたことなどをきっかけに、カトリック・キリスト教に関心をもつようになり、紆余曲折を経てカトリック教会の神を信じるようになる、いわゆる回心を体験する（八・一二・二八-三〇）。

このように、ファウストゥスとの出会い以後の展開をたどると明らかになるように、マニ教にとどまったことによって保たれ、それにともない新たに生まれた人間関係が、かれをミラノに呼び寄せ、回心をかいしてカトリック教会にいたらしめた。停滞的で非生産的な宙ぶらりんの状態が、かえって豊穡な実りを呼びよせたのだ。アウグスティヌス自身は、いわば優柔不断だったにすぎないが、それが豊かな実りに結びついたのは、神の配慮があったからだ。『告白』を書いているヒッポ・レギウスの司教は、そう考えている。

宙ぶらりんの状態のもとで、カルタゴをあとにしてローマに赴く決断をしたことを、アウ

グスティヌスは次のように回想している。

ところが、あなた〔神〕……は、地上の場所をわたしのたましいの救いのために移すよう、カルタゴではわたしがそこから引き離されるために突き棒を動かし、ローマではわたしが引きつけられるために、死せる世を愛するひとびと〔マニ教徒〕……をとおして、もろもろの魅惑をわたしに差し出して、わたしの歩みを矯正するために、かれらとわたしの転倒をあなたはひそかに用いたのだった。じつのところ、わたしの閑暇をかき乱していた連中は、だらしのない狂気によって盲目だったし、別の地に招いていた連中は地を味わっていたし、たほうわたしはといえば、ここでは真の悲惨をのろい、かしこでは偽りの幸福を欲していた。(五・八・一四)

生徒たちの愚かしい無法な乱暴と、カトリック・キリスト教の神に背を向けるマニ教徒仲間の勧めが、地位と名誉を欲するカルタゴの若き修辞学教師にローマ行きを決断させた。てんではたらく三つのベクトルは、合力してアウグスティヌスをミラノへ、カトリック教会の神への回心に導く。『告白』の著者にとって、これらの三つのベクトルはいずれも、意志にもとづくというよりは、「かれらとわたしの転倒」といわれているように、盲目的な欲望の圧力とみなすべきものである。それらは、しだいによじりあわされるかのように合力して、いわば予定調和的にミラノの回心に収斂した。アウグスティヌスは、そのことに気づき、それを神の計らい、神の配慮と考え、「あなたはふしぎなしかたで、わたしに関与した」とコメントする。アウグスティヌスの恩恵論の基盤が、まさにここにある。ところで、神の恩恵の海原を漂う若者において、浮力というべきものがあつたとすれば、真の知恵を希求するその熱意だろう。

(二〇一三年五月三一日)

【参考文献】

松崎一平「アウグスティヌスとプラトニズム」(第五九回大会シンポジウム「中世におけるプラトニズム—教父時代から12世紀まで—」提題)『中世思想研究』第五四号、中世哲学会編、二〇一二年、一〇七—一九頁。

なお、テキストはCorpus christianorum所収のもの。翻訳はすべて松崎による。

◇編集後記◇

『とい』三二号にも四編を掲載する◇十九世紀の英国、三世紀～七世紀の日本、二十一世紀の日本、四世紀の地中海を舞台とする論考である。これらの点をつなぐ線は、たえざる「といかけ」である。今の日本の状況を直接問うものではないが、しかし、「とい」の姿勢を示そうとするものである◆イエズス会詩人ホプキンスの神髄はソネットにある。その一編を読み解く試みを冒頭に掲載する◆次なる論考は、古代日本の統治・支配体制を明らかにする。何のための、誰のための政治かが問われている現在、はるかな視座の高さが必要とされる◆混迷する大学制度の中で、大学入試改革論もまた時を待たないが、めまぐるしく展開する言説にまどわされないために、一読したいのが三番目の論考である◆以上をしめむすぶのは、わたしたちに「神の配慮」というものを、きづかせてくれる、あざやかなかたりである◇今年もまた、ささやかながら、皆様に『とい』をお届けします。<<>

編集・発行： グループ帆（代表 / 松崎 一平）

〒930-8555 富山市五福 3190

富山大学人文学部内人間学（松崎）研究室